

ヒッポクラテス文書集成『医術について』本文校訂ノート(2)  
de arte 11.6—Jouanna

安西眞

1

de arte 11.6—Jouanna<sup>(1)</sup>の本文に関わる以下の議論は、本文に関わる処置(すなわち *paradosis* の擁護)に関して言えば、既に本稿筆者から見れば妥当と思われる判断が Daremberg によって 19 世紀の半ばに提示されている<sup>(2)</sup>。にもかかわらずここで筆者は、基本的には彼の処置をよしとすべきであるという内容の主張をしようとしている。彼の主張を繰り返す理由のひとつは、彼の提案が彼以降の本文校訂 (Ermerins<sup>(3)</sup>, Reinhold<sup>(4)</sup>, Gomperz<sup>(5)</sup>, Heiberg<sup>(6)</sup>) に残念ながら影響を与えなかったという事実そのものである。正しい理解はあくまで主張され、認められる必要がある。第 2 の理由は、この文書の書き手はかなり弁論術的な知識と経験の持ち主と見えるが、その事実をこれまでの校訂者あるいは注釈者たちが、現実には軽視してきたという事実である。Daremberg の提案が軽視されたのは、こういう事実と深い関連がある。Daremberg の提案に従うことによって、また、彼の本文選択を弁護することによって、現在の研究者たちの意識の水準を考慮に入れると、この文書の弁論術的性格をより正しい光のもとに置くことができると筆者は判断する。この文書の書き手の正体、ひいてはこの文書の性格を考える上で、この一節の理解は大事な意味を持っていると思う。だからあえて、「二番煎じ」、と言われかねない議論をする<sup>(7)</sup>。

(1) J.Jouanna, *Hippocrate, Œuvres complètes*, V, 1, Paris, 1988.

(2) Ch.Daremberg, *Œuvres choisies d' Hippocrate*, 2nd ed., Paris, 1855.

(3) F.Z.Ermerins, *Hippocratis et aliorum medicorum veterum reliquiae*, vol.II, Traiecti ad Rhenum, 1862.

(4) C. H. Th. Reinhold, *Ἱπποκράτης*, vol. I, Athens, 1865.

(5) Th. Gomperz, *Die Apologie der Heilkunst*, 2nd ed. Leipzig, 1910.

(6) I. L. Heiberg, *Hippocratis Opera*, C. M. G. I, 1, Berlin, 1927.

(7) ただし、筆者が二番煎じであることをあえて認めるのは、ひとつには、Daremberg が MA 写本をそのまま読むべきだという主張をしたという点について賛意を表するという点であり、もうひとつには、この文には明らかな均衡と対比が文構造として見えるということに賛意を表するという点である。この 2 点に類似は限られる。

## 2

問題の箇所は de arte 11.6—Jouanna である。文がどこで始まり、どこで終わるかということも校訂者たちを悩ましてきたことのひとつであるから、問題の箇所の前後をやや広く引用する：

.....θάσσον· προλαβὸν δὲ θάσσον·  
 προλαμβάνει δὲ,διὰ τε τὴν τῶν σωμάτων στεγνότητα,  
 ἐν ἧ οὐκ ἐν εὐόπτῳ οἰκέουσιν αἱ νοῦσοι,διὰ τε τὴν  
 τῶν καμνόντων ὀλιγωρίην,ἐπιτίθεται· οὐ λαμβά  
 νόμενοι γὰρ ἄλλ' εἰλημμένοι...

A 写本 (Parisinus gr. 2253) の、この部分を写した頁 (80r) の配置を概念的に表示すると上ようになる。上の概念図ではカンマの後ろにスペースが取ってないが、それは A の配置に近づけてあるためである。中世伝承の祖本の形を定めるもうひとつの本である M (Marcianus gr. 269—筆者未見) については、Jouanna の報告に従い、また、M からの直接の伝承線上にあると判断される、I (Parisinus gr. 2140) と H<sup>1</sup> (Parisinus gr. 2142) を参考にして、この校訂ノートは作られている。問題は上の最後の行にある ἐπιτίθεται を巡っておきている。

A は全体としても、上のようにして、スペースを使って文のはっきりした切れ目を表現している。句読点は多くは打たれていない。いくつか見える句読点的なものうち、high-stop 風のもは A の写し手自身によるものと思える。ほぼ、スペースの「空き」と連動しているからである。上の表示でカンマで表現したもののほとんどは、後からこの写本に関わった者の手 (A<sup>2</sup>A<sup>3</sup>A<sup>4</sup>) によるのであろうと推測できる。これもスペースとの関連からである。これらカンマは語と語の間隔がないところへ、モノクロ写真でも明確に色合いの違いが分る、太さも違うもので記されているからである。

句読点について記したのは、ἐπιτίθεται という語の前のあるいは後ろの文への所属如何が校訂者たちの頭を悩ましてきたと思われるからである。Jouanna のテキストに付された、この語を対象にした ap.cr. をここに再録する。

ἐπιτίθεται AM: ἐπιτίθενται A<sup>com</sup> : ὑπερτίθεται γὰρ Zwing.<sup>ms</sup> : ἐπεὶ ἔοικε Littré : ἐπεὶ τί θῶμα; Gomperz

実際にはさらに多くの読み替えが提案されているのだが、その中から選ぶというのではないので、Jouanna がじゅうぶんと判断した範囲にとどめておきたい。この範囲だけでも、ルネサンス以降の推測読みのすべてが ἐπιτίθεται を核にして別の文を作り出そうとしていることが分るだろう。そしてこれと全く無縁ではないのだが、ἐπιτίθεται の主語に関して、A<sup>om</sup> と同じ種類の疑問を持っていることも分るだろう。A<sup>om</sup> の推測していることは、そこになんらかの判断が働いているとすれば、ἐπιτίθεται の主語として可能性の高いのは、αἱ νοῦσοι だという判断であろう。複数形の動詞はそのようなものとしてのみ意味を持つからだ。

また、提案された推定読みのすべてが ἐπιτίθεται から別の文を作り出そうとしていることは、ἐπιτίθεται の前に A<sup>2</sup> あるいは A<sup>3</sup> が打ったカンマが引き起こしたことだ、とも言えるであろう。

ついでに言えば、最も新しい、かつ、最も AM の伝承上の意味(祖本の形を決定する 2 本の伝承線そのもの)を正確に理解している校訂本(Jouanna 版)も、結局 ἐπιτίθεται の前に打たれたカンマに縛られている。彼は、προλαμβάνει δὲ で文を開始し、ἐπιτίθεται の前にカンマこそ打たないが、かわりに関係代名詞 ἣ を挿入し、そしてそれに ἐπιτίθεται を従わせてそこで文を閉じているからである。すなわちある種 ἐπιτίθεται を独立させているのだ。そして次のような訳を付す：「病いは患者に先んじる、ひとつには、諸病が見えないところに巢食う身体の隠蔽性の故に。もうひとつには、それに加わるところの患者の病いへの軽視によって。」

ここでこの文の置かれた文脈を簡単に説明しておこう。技術としての「医」に大きな障害がある。病いが直接視認できないことによって、病いの発見が遅れ、従って治療が後手にまわり、病いが先行し、破局に至る事態がある、という難問である。しかし、この視認の遅れ、そしてそれによって結果する破局に関しては、患部を見えないところに持つという「自然」と、患者の無知(ここでは軽視という表現になっている)と無力に責任を求めるべきことであって、技術としての「医」を責めるのは意味がない。ほぼ、こういう文脈中に上の文は置かれている。

校訂者たちを惑わしてきた理由は以上を要するに 2 つ。ひとつは、ἐπιτίθεται がどの文に所属するかということ。もうひとつはこの動詞の意味がどのようなものであり、またその主語は何か、ということである。両者は当然ながら連動する。

それから、もうひとつ。写本 A と M が CH *de arte* の中世書写伝承上の祖本の形を決める文句無しの2つの源泉であるということが、今日の文献学が到達した結論であること、そしてそれがきわめて説得力の高いものであるということは、それとして認めるべきであることは筆者も実感している。しかしその時、 $A^2A^3A^4M^2M^3$  などという形で Jouanna が校訂本で使用している記号に該当するそれぞれの写本への、原本成立の際の書写者以外の介入者の行為はどのような位置を占めるべきなのか？ こういうごく基本的なことがらについての問題もこの箇所は投げかけているように思う。もちろんこの基本的な問題についての態度は簡明であるべきだ。もし、 $A^2A^3A^4M^2M^3$  が原書写の訂正その他を行った際、AM が書写した祖本その他の原本と同じものを見て訂正等を行っていることが明らかである場合を除いて、これら後発の読みは、祖本の読みの再構築に生かすべきではない。少なくともそのことに関して慎重であるべきだ。それら後発の読みが、祖本の読みとは違う経緯で古代の読みを伝えているという可能性を留保しつつも、あくまでも、推定読みという基本的な色分けのうちに入ったん分類した上で考えるべきなのだ。

それを、この ἐπιτίθειαι をめぐる処理の問題の場合、Gomperz にせよ、Jouanna にせよ、それぞれ微妙に評価は異なるが、基本的には AM の持つ決定的な意味を承知している校訂者たちが、完全に上に記した原則を忘れて、 $A^2$  あるいは  $A^3$  の打ったカンマから思考を開始しているとしか思えないのはどうした訳であろうか。Jouanna などは次のような補注を ἐπιτίθειαι につけている：「ἐπιτίθειαι は前の文についているのか、後ろの文についているのか判然としない」<sup>(8)</sup>。

確かに、I や H<sup>o</sup> から推定するかぎり、M ではそうかも知れない。しかし、A を最初の書写段階の現状にもどして考えれば（それは A をたとえ写真をつうじてであっても目にしさえすれば、それほど難しいことではない）そんなことは言えないはずだ。その段階では ἐπιτίθειαι の前にはいかなる句読点もなく、スペースも置かれていない。逆に ἐπιτίθειαι の後ろには high-stop が打たれて、明らかなスペースが置かれ、続く οὐ λαμβανόμενοι γὰρ は明らかに新しい文単位が開始されていることを告げている<sup>(9)</sup>。

(8) Jouanna, 263

(9) γὰρ の後ろの high-stop は、スペースもなく、色は判断できないが、他の A によるそれとは違って点そのものがかなり大きく、恐らく A 以外の手によるもの。なお、ここでは οὐ λαμβανόμενοι は、続く ἀλλ' εἰλημμένοι (病いに捕まってしま

ちょっと、小ノートにしては長い脱線が多すぎたという反省があるので、結論を急ごう。Daremberg は、προλαμβάνει に始まり ἐπιτίθεται で終わる文にはきれいな平行、繰り返し、対比構図が見られるというのが、彼の主張を生かして、この文を次のような形で図式的に配置すれば AM の伝える読みが正しいものであるという可能性は一気に見えてくるだろう。

προλαμβάνει δὲ

διὰ τε τὴν τῶν σωμάτων στεγνότητα ἐν ἧ οὐκ ἐν εὐόπτῳ οἰκέουσιν αἱ νοῦσοι

διὰ τε τὴν τῶν καμνόντων ὀλιγωρίην

ἐπιτίθεται

わざわざこのように図で示した意図は、言うまでもなく、προλαμβάνει と ἐπιτίθεται の主語は同じだということである。そのように少なくとも筆者は読む。つまり、最初の引用には見えていた分詞 προλαβόν に対応する中性名詞 νόσημα (病い) である。ἐπιτίθεται は LSJ, s.v. 'ἐπιτίθημι', B, III, 2 に分類される用法で使われている。すなわち、med. で、普通は与格とともに「～を攻撃する」という意味で使われる用法である。文脈によってはもちろん与格を省いた形で使われることもあることを LSJ は記している (Th.7.42.1)。ここでも、攻撃される者は文脈によって明白 (τῶν καμνόντων によって指示されている人間) であるから表現されていない。προλαμβάνει も、明らかに他動詞であるのに、対格なしで使われている。目的語が患者あるいは τῶν καμνόντων によって指されている存在であることは明白であるからだ。そして文全体を形を生かして翻訳すると：「(病いは) 先制攻撃を仕掛ける、諸病が巢食う場所が身体によって隠蔽されているが故に可視ではないという事実をつうじて。そしてまた、(病いは) 病いにおかされた人間たちの不注意をつうじて追加攻撃を仕掛けるのだ。」

さらに、προ- と ἐπι- という前つづりの持つ対比的な意味(「さきに～する」と「あとから～する」)にも注目したい。その「さきに～する」が文の先頭に来て、「あとから～する」が最後に来る。そして中間は明らかに並行的な構造を持ったものの繰り返しで構成される。これはほとんど詩的というよりもう遊戯に近い文の構成法である。上にあげた図はそういう構造を我々に見せてくれている。

---

って) に対応してひとつの概念、つまり、病いに捕まりつつある状態、を表現している。γὰρ が文開始の 2 語目ではなく、ひとつの句の後ろ(語の単位で数えれば 3 番目)にくるケースである。cf. Denniston, *GP* 95-96

最後に、校訂者たちに、そしてCH読みたちにさまざまな混乱をもたらしてきた  $\acute{\epsilon}\nu\ \eta\grave{\iota}\ \sigma\acute{\upsilon}\kappa\ \acute{\epsilon}\nu\ \epsilon\upsilon\acute{\omicron}\pi\tau\omega\ \omicron\iota\mu\acute{\epsilon}\omicron\upsilon\sigma\iota\nu\ \alpha\iota\ \nu\omicron\upsilon\sigma\omicron\iota$  という「付加物」について、やはりひとことふたこと言っておかねばなるまい。

まず、先きにあげた図式からこの部分を取り去ってみよう。そこには、完璧な構造が出来上がる。完璧な構造は見れば分るから説明しない。この文書の原初の書き手に対して、不遜にもギリシア語作文教師となって「これを取ったらどうか」などと勧めてみたくもなる。そのことは、いくらか真剣な意味も含意された冗談としておくけれども、この部分が、校訂者や中世写本に書き込みをした者たちに多大の混乱をもたらしてきたことは説明してきたように事実である。特に  $\nu\acute{\omicron}\sigma\eta\mu\alpha$  という単数形で表現される概念と、 $\alpha\iota\ \nu\omicron\upsilon\sigma\omicron\iota$  という複数形で表現される事象との弁別の難しさがこの混乱の根底にあることは簡単に見て取れるだろう。もちろん、この文書全体を知る者には、書き手が当時(前5世紀後半)の哲学的な議論をよく知る者であることはじゅうぶん分っている<sup>(10)</sup>。要するに単数で普通示される概念とそれに包含されうる諸事物との関係を区別できる者には、混乱は生じない、とも言える。しかし、そこにはひとつ重大な問いが潜んでいる。この文書は明らかに演説の形を取っているのだ。

ギリシア語作文の水準の、あるいは文芸批評的な水準の問題は別としても、文献学的にこの文書に接近しようとする者にも、この付加された  $\acute{\epsilon}\nu\ \eta\grave{\iota}$  に導かれた関係節が実際にもたらして来た混乱は、実はある重大な意味を持つ。つまり、中世あるいはルネサンス以降の読み手が見せた混乱の一番奥にある問題、 $\nu\acute{\omicron}\sigma\eta\mu\alpha$  と  $\nu\omicron\upsilon\sigma\omicron\iota$  の区別を、この文書のもととなったかもしれない、実際に行われたとされている演説行為の聴衆はできただろうか、 $\acute{\epsilon}\pi\iota\theta\epsilon\tau\alpha\iota$  の主語が  $\nu\acute{\omicron}\sigma\eta\mu\alpha$  であることを理解できただろうか、という疑念である。少なくとも、Aに介入した「直し手」や、ルネサンス以降の校訂者たちには区別は難しかったのだ。これがさきの冗談の背後にある深刻な意味のひとつである。

この疑問に対しては現在のところ筆者は2様の解答を用意している。実際に演説は行われた。その言わば上演行為の中で、 $\pi\rho\omicron\lambda\alpha\mu\beta\acute{\alpha}\nu\epsilon\iota$  と  $\acute{\epsilon}\pi\iota\theta\epsilon\tau\alpha\iota$  の主語の同一性は、休止や、抑揚、音声の強弱などの手段をつうじて確保できただろう。これがひとつの答えである。

もうひとつには、演説の形態を持つてはいるが、この文書は実際には「上演」を予定したものではなかった、という可能性を指摘したい。プラトンの「弁明」

(10) 古代哲学史家である Gomperz (注5参照)をして、かなり真剣にこの小冊子の作り手をソフィストの流れの中に位置づけようと試みさせたほどに。

を思えばよい。「弁明」は言うまでもなく、実際に陪審員の前で演じられることを目的としたものではない。

筆者は、後者が事実ではなかったかと疑い始めている。確かに、立派な *peroratio* を持ち、ウィットに富んだ *prooemium* をこの「演説」は持っており、作者の並ではない文章構築技術は、その一部を紹介したばかりではある。しかし、この文書には、聴衆らしきものたちに対する呼びかけも、それらの存在無しには考えられないような 2 人称表現を使った言語交流も見出すことができないのである。こういう特徴は少なくともアテナイの古典的な演説には見出すことができない。そこに、たとえばアンティフォンの、上演されなかったことが確実なものを含めてもそうなのである。

以上、*CH de arte* を正確に理解するには、あるいはまた、この文書の校訂・注釈本を作るのにも、この文書の作り手が他の *CH* 文書の作り手とは質的に違った修辭的能力を持つ者であること、またこの文書そのものも、明らかな修辭的な意図をもって作成されたのだということを自覚した上でなければ難しいということを、ルネサンス以来の校訂者たちの—あるいはここに中世写本へ書き込みを行った者を含めても—ある箇所をめぐる混乱と、その部分を伝える 2 つの根本写本の読みの正しさとを対比するという形で論じた。

(北海道大学)